

「江戸時代の易占書の特質」(要旨)

奈良場 勝

現代において「易」とは、筮竹と算木を用い、『易経』の卦爻辞によって占うものであると言えよう。しかし、筮竹や算木が易の占具として定着したのは1750年代以降であると考えられ、『易経』が占いのテキストであったのは、江戸時代の初期と末期のみに限られると言って良いと思う。すなわち、江戸の中期頃は『易経』以外の易占書が用いられ、占具や占筮法も異なっていた時代なのである。従って「江戸時代の易」といっても、時期的に区分した上で、広義な捉え方をする必要があるだろう。

すでに中世末期までに、易の陰陽卦を用いた複数の占術体系が確立していた。それは「古暦」と「八卦(はっけ)」という占術である。

まず「古暦」については、対象人物の生まれ年と月の数字を易卦に対応させ、『易経』の卦爻辞を用いて占断するというものであり、古暦は占筮法のひとつとして機能していたと言えよう。中世に行われていた「周易伝授」という師弟間のやり取りの中では、古暦の占法が「三箇の秘伝」といった表現で残されていることから、中世末期までは極一部の人間しか知り得ない占法だったと推測される。しかし、近世に入ってから出版され、その存在を広く知られることになったようだ。元和三年(1617)、元和四年(1618)、寛永八年(1631)の三版が初期の形式として現存しているが、和算家の吉田光由(1598-1673)によって『古暦便覧』の形式に改められてから占術としての性格を失い、単なる暦として認識されるに至ったようだ。

次に「八卦」であるが、こちらは陰陽卦や易の卦名を用いるものの、『易経』の卦爻辞を用いない占法である。八卦は仏教的色彩の濃い易占であるが、マティアス・ハイエク氏によれば中国の『五行大義』の理論をもとに考案され、日本国内で独自の発展を遂げたものだという。現在の四柱推命方式と同じく、対象者の生年月日時の数字を計算した上で占断する。『易経』の辞句から連想する形式ではなく、病気や遺失物など項目別の吉凶が即時にわかる形式(即時占)になっている。職業的に使用された折本形式から発展し、1650年頃から1750年頃に『八卦〇〇抄』といった名称で出版され、広く知られるようになった。

すでに中世に定着していた「古暦」「八卦」に比べ、比較的新しいものが「断易」である。中国の万暦年間(1573-1620)に出版されたものが日本に舶載され、和刻本の刊行によって浸透して行ったようだ。ただし、万暦版断易書の受容に関しては、断易本来の五行相生相克の理論ではなく、おみくじ的な即決性だけが取り上げられることになった。こうした複数の易占術が行われていた中、1750年代に『日月卦伝鈔』『卜筮盲筮』『易学小筌』といった袖珍版の易占書が登場し、大いに流行することとなる。こうした易占書は中世以来継承されてきた占術や断易の一部分を取り入れたものであり、『易経』とは全く別の流れを承けて成立したと考えられる。そうした意味では、近世の易占書は日本固有の発展を遂げたユニークな書籍群であると言えるだろう。

(『新陰陽道叢書』第3巻近世編所収 2021年名著出版)